

《 概要 》

- 中学校第3学年女子。小学校高学年の頃から不登校傾向があり、中学校第1学年の5月から不登校となった。ひとり親家庭であるが、保護者は生徒に丁寧な支援を行ってきた。別室登校も試みたが、途中で行けなくなった。相談対応、及び試行登室を経て、正式に適応指導教室に通うことになった。
- 「新しい環境（人物や取組を含む）」に慣れるまで時間がかかるという生徒の特質を考慮し、焦らず丁寧に支援の段階を進めていくことを重視し、学校復帰への働きかけを避けるように留意した。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<p>○ 丁寧な場面設定 生徒の実情をみとり、ゆっくと支援段階を進める。</p>	<p>○ 丁寧な場面設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 母親同伴の試行登室を2か月（週1時間分）実施 ・ 苦手意識のない教科を学習。後に日々の宿題も導入 ・ 「新たな人」との接触場面を、少しずつ増加 ・ 無理な登校刺激（定期考査、行事参加）をしない。 <p>⇒慎重に見取って段階を進めた結果、当該生徒は少量の負荷のある「小さな挑戦」を積み重ね、それら全てを教室生活に取り込むことができた。</p>
<p>○ 学習能力の維持 学ぶ習慣を保つことで、理解や態度などの低下を抑える。</p>	<p>○ 学習能力の維持</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、週2日の登室（日に1時間分の学習活動） ・ 講師による特別学習（美術や不登校体験談を聞くもの等）を設定 <p>⇒学んだことが定着していることや、丁寧に立式し計算処理を行えることなど、堅実にまじめに取り組む態度はより高まっている。また、遅刻や欠席もほとんどなく、生活態度も良好である。</p>
<p>○ 併設相談室の活用 意欲喚起や不安感低減をはかるため、相談の時間を確保する。</p>	<p>○ 併設相談室の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習活動の前の30分間、相談員と会話して過ごす場面を確保 <p>⇒人見知りである当該生徒が指導員や室友と交流することを通して、「気力を充電する」機会になっている様子がうかがえる。</p>

《 本事例の留意点 》

- 適応指導教室への通室及び学習活動の安定化は、不登校状態であった生徒の「学びの機会」を拡充するのに一定の効果があつた。それは当該生徒が「まじめに努力する」性格によるものである。
- 一方で、登校刺激を極力おさえた結果、在籍校との関わりは、進路指導に限られてしまっている。学校生活の中で培われるであろう様々な能力向上への「学びの機会」へと進展させることはできていない。

《 概要 》

- 当該生徒は、中学校第3学年で、特別支援学級（情緒）に在籍している。小規模校であるため、生徒数は少なく、特別支援学級在籍は当該生徒1人である。当該生徒は、学校に足が向かず、母親は、養育について教育相談所の教育相談を受けていた。
- 当該生徒は、適応指導教室「つばさ学級」において、明るく活動しているが、集団活動をするときは、相手の思いを受け取ることが苦手で、感情の行き違いが起こりやすかった。
- 中学校卒業後の進路について、保護者は高等養護学校への進学を考えていたが、当該生徒の意思等により、道立高等学校の定時制への進学希望に変わった。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○保護者支援

保護者に対し、子どもの養育に関する教育相談を実施し、継続的にサポートした

○進路実現

適切な進路選択に向け、情報提供を行うとともに、生徒の在籍校と連携して進路指導を行った

○関係者との連携

中学校区のネットワーク会議において情報を共有するとともに、関係機関が連携して生徒への指導を行った

相談・支援等の状況

- ・稚内市は、適応指導教室と教育相談所が併設されているため、日常的に連携を図ることができ、適応指導教室における生徒への指導と、教育相談所における保護者への教育相談を一体的に行った。
- ・適応指導教室「つばさ学級」における諸活動を通して、当該生徒の情緒の安定を図るとともに、当該生徒の変容を保護者と共有することができた。
- ・当初、保護者は、高等養護学校への進学を考えていたが、適応指導教室に在籍した生徒の中学校卒業後の進路や、道立高等学校定時制の学習内容等の情報を提供し、主体的な進路選択を促すとともに、さまざまな選択肢の中から当該生徒に合った進学先を決めるよう指導した。
- ・進学に向けて必要な学習支援の内容等について、当該生徒が在籍する中学校と連携を図り、生徒の進路実現に向けた取組を進めている。
- ・当該生徒の保護者や在籍する中学校との連携が運営の基本になっているが、それに加えて、稚内市の中学校区ごとのネットワーク会議における情報共有と関係機関との連携を大切にしている。
- ・生徒の希望進路の実現には、在籍する中学校のほか、進学を希望する道立高等学校との連携が重要であり、早期からの情報共有を通じて、生徒一人一人の実態に即した適切な指導につなげている。

《 本事例の留意点 》

- 当該生徒の主体的な進路選択を促すため、家庭や生徒が在籍する中学校と連携した進路指導に取り組む。
- 当該生徒の特性を理解するとともに、関係機関の適切な情報共有や連携により、継続的に生徒への支援を行う。

Keyword

「興味関心を高める」「学習に対する意欲や自信の回復」

《 概要 》

- 平成31年4月の開設時は3名が登録。2年前までは年に1名を対象に数か月の適応指導対応が行われていた。
 - 現在は2名が通級している。現在、中学校第2学年で、小学校低学年から登校渋りがあり、高学年で不登校状態になっていた。もう一人は、現在、小学校第5学年で、当該児童の姉が友人関係でトラブル（SNSのやり取り等）があり、仲の良い友達が転校したことをきっかけに不登校になり、それと同時に当該児童も不登校になった。小学校第2学年の児童は登録しているものの、教室には来ていない。
- 〔適応指導教室の方針〕
- 児童生徒、保護者と悩みや不安等の相談できる関係を築き、家庭と連携を図った指導、援助を行う。
 - 児童生徒が持っている興味関心をもとに、意欲や自信回復を目指した取組と自己肯定感を育む。
 - 在籍校及び関係機関との連携を図り、スムーズな運営と指導を進める。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童生徒の興味関心をもとに、関係づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 上記の児童生徒保護者及び学校から要請があり、教育相談員（兼SSW）が対応して適応指導教室を開設した。 ○ 中学校第2学年の生徒は、高等学校を卒業したばかりの姉がいるが、ともに外に出る機会が少なく、生徒が興味を持っている卓球の取組を促す声掛けを行った。 ○ 週2日、午前中の2時間来所し、保護者と共に時間を過ごしている。その際、教育相談員が保護者と面談し、保護者の養育への支援を行っている。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童生徒の主体的な活動への意欲を高める声掛けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 何かやりたいことはないか声掛けすると、誕生会やおやつ作りをしたいなど、自分のやりたいことを言えるようになった。 ○ 簡単な調理やパークゴルフ、卓球等の諸活動を通して、自分の気持ちを素直に表すことができるようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 自己実現の機会をサポートする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校第5学年の児童は、姉が中学受験に合格し、親元を離れて中学校生活を送っている。楽しい学校生活を送っている様子を身近で知ることにより、当該児童は、学校に行くことに期待が持てるようになった。現在は、放課後の2時間、学校に登校している。 ○ また、当該児童は、進学に向けて学習意欲が高まり、主体的に課題に取り組むようになった。また、その様子を他の児童生徒が見て、「自分も勉強したい」という意識が高まるなど、学習意欲を高めるきっかけとなった。 ○ 通級者間で連絡を取り合い、教室以外の時間で交流が深まる中で、音楽に興味を持った当該生徒は、町内で活動しているゴスペルグループの練習に参加した。活動が自信につながり、毎週水曜日の午前中2時間登校するようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 在籍校と情報共有を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 在籍校の学級担任や管理職が、適応指導教室における児童生徒の様子を参観している。在籍校の教職員が、一緒に活動に取り組んだり、会話を楽しんだりするなどして、当該児童生徒の様子を把握している。 ○ 定期的に在籍校との情報交流の場を設け、現状の共通理解を図るとともに、効果的な支援策について協議している。

《 本事例の留意点 》

- 当該児童生徒だけでなく、保護者への支援を行うことで、不登校児童生徒に対する理解を促すとともに、通級者間の交流や学校と家庭との連携により、当該児童生徒の活動に対する**興味関心を高める**。
- 当該児童生徒の気持ちに寄り添い、**学習に対する意欲や自信の回復**の様子を捉えて、活動を支援する。

《 概要 》

中学校第1学年から特別支援学級に在籍していたが、交流学級でのトラブルなどから不登校になった。第2学年の4月当初、学級担任や管理職と相談しながら、具体的な学校復帰に向けてのプログラムを作成し、実行した。負担が少なく、自然な形で登校刺激を与えながら、ゆっくり取組を進めた。夏休み以降、学校行事への参加ができるようになった。学校は、個別の支援計画の見直しと柔軟な運用を考えながら、受け入れ態勢を整えた。適応指導教室「あおぞら」では、当該生徒との面談を通じて1週間の時間割を決め、基礎学力の向上や適切な進路の在り方を模索した。4月～7月は、家庭訪問の充実、受け入れ態勢の整備、8～11月は、登・下校時の打ち合わせ、友人からの手紙、答案・通知表の返却、行事への参加などを段階的に進めた。学校復帰を目標に、日常的な情報交流を進め支援を継続している。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○支援計画の策定
生活習慣の見直しと
1週間の学習計画の
策定

○連携
学校、担任、保護者の
情報交流と本人の自
覚を促す生徒指導

○自立
自立に向けた連携強
化と学校復帰向け
た支援・方策

相談・支援等の状況

- 学校と当該生徒の不登校に係る過去の経過や課題、特別支援学級や交流学級の様子について情報交流。今後の支援、方針、方向性について協議。
- 学校復帰に向けた支援プログラムの作成、学校、家庭との共通理解。
- 学校行事参加の呼びかけと月ごとの計画や到達目標の決定・実行。
- 担任の家庭訪問を通じ、進路に向けた相談や体験入学の説明。
- 登校刺激を考え、送迎、慣らし登校、登・下校時の打合せを実施。
- 通級率 4～7月・・・75% 8月～10月・・・82% 11月・・・70%
- 適応指導教室の全ての行事に意欲的に参加した。
(春の遠足、見学体験学習、野外炊事、遠足、見学旅行、社会見学)
- 数学が好きで、一定の理解力もある。定期テストも受けている。
- 運動については、バドミントンが好きで熱心に取り組んでいた。
- 定期的に個別面談を実施し、学校への抵抗感や友人関係などについて聴取した。また、適宜通学状況を確認しながら、学校復帰へに向けた支援を継続した。
- 定期的な学級担任の定期的な訪問や声掛けが信頼関係を醸成する一助になった。
- 学校行事やテスト返却にも抵抗なく学校へ足を運べるようになった。
- 適応指導教室の後、放課後デイサービスに移動するため、日常的に担当者との情報交換を行った。家庭の状況により不眠や精神的な不安定さが顕著に現れた。
- 発達障がいの状況を把握しながら、生徒理解、復帰支援を継続させていく。

《 本事例の留意点 》

- 通級時の実情や問題点を、保護者や担任・管理職と情報交流しながら連携を緊密化した。
- 担任は、半年間の復帰プログラムを月ごとに作成し、達成状況を適応指導教室と共有した。
- ゲーム依存や家庭での状況、就寝時間や薬の影響から、授業中の居眠りが常態化していたが、家庭と連携し、生活改善に向けて本人の自覚を促したことにより、徐々に改善が見られた。
- 母親の就職活動や日常的な忙しさから、本人なりに疎外感を持っている。悩みに寄り添い、本人の意向に沿った形で指導を進め、適宜、適切な登校刺激を与えるように心がけた。

Keyword

「寄り添う支援」「信頼関係の構築」「三者の連携」

《 概要 》

中学校第2学年の当該生徒は、自閉傾向が強く、人と話すのが苦手である。初対面の人に会うと机の下や狭い隙間に隠れ、トイレに逃げ込むこともある。そのため、集団の中で行動することが難しい。小学校第6学年の時に転校してきたが、当時から不登校傾向にあり、その前はフリースクールに通っていた。休みながらも小学校には通っていたが、中学校へ上がると困り感が増えた。集団活動が難しくなり、昨年5月に保護者と当該生徒が相談に来て、通級が始まった。

適応指導教室の指導員や生徒達に少しずつ慣れることからスタートし、教室内に当該生徒の居場所をつくり、集団活動に参加することを目標に取り組み、適応指導教室に休まず登校できるようになった。また、今では週2日中学校へ登校している。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○寄り添う支援

実態把握
相談室との連携
保護者との面談
学校との情報共有

○信頼関係の構築

支援による生徒
の変容
居場所の確保

○三者の連携

高校進学へ向けて

相談・支援等の状況

- 通級開始時、当該生徒は体調が悪いと話しかけても反応がなく、疲れると泣き出した。初めての人に会うとトイレや狭い隙間に隠れ、それでも落ち着かない時は毛布にくるまって、じっとしていた。また、自分の考えと異なるものを容易に受け入れられない様子が見られた。そこで、家庭・教育相談室の相談員と話し合い、当該生徒に発達検査を促した。
- 学校へ行くとストレスから具合が悪くなった。板書を写すのが遅く、授業に付いていけない。実験や実習などの授業では、何もさせてもらえず、当該生徒に居場所がなかった。保護者との面談において、指導方針を確認し、生活面や学習面の支援を行った。
- 体調が悪い時は回復するまで待ち、当該生徒が話せるようになったら、指導員の所へ来て、その旨を伝えるなど、当該生徒のペースに合わせた支援を行った。2ヶ月後、イラストを描くことをきっかけに、指導員や他の通級生との間に信頼関係が生まれ、調理実習などの集団活動にも参加するようになり、当該生徒にとって適応指導教室が「居場所」となった。そして友達が出来たことで、相手への思いやりが少しずつ育ってきた。
- 発達検査では、発達の偏りが大きく、こだわりが強いという結果が出た。そのため、自分の誤りを素直に受け入れることができず、相手に不快感を与える等の問題を起こす。当該生徒の将来を考え、学級担任と何度か話し合いをもった。卒業、進学に向けて支援学級へ編入が最善だとの共通理解の下、保護者、学校、適応指導教室の三者で面談をし、第3学年から支援学級への転籍を決定し、現在週2日午後から登校している。

《 本事例の留意点 》

- 自閉傾向が強い当該生徒が、**寄り添う支援**を続けることで不安がなくなり、自分の居場所をつくったことがきっかけで、他の生徒達と一緒にいる集団活動（栽培作業、運動、調理実習など）に参加できるようになった。また、外部講師の授業である英会話、茶道、パン作りなども受けられるようになった。
- **保護者、学校、適応指導教室の連携が信頼関係を構築**し、当該生徒の将来を考えた支援は最終的に学校復帰の足掛かりとなった。

《 概要 》

- 当該生徒は中学校第1学年男子。小学校第4学年の時に両親が離婚し、隣町の小規模校から紋別市内の多級校へ転校してきた。小学校第5学年から少しずつ欠席するようになり、中学校第1学年6月からほとんど登校できなくなった。特別支援学級在籍の生徒に対する配慮に欠ける対応があることから、当該生徒は登校しようとするとう腹痛が起きるようになった。ただし、当該生徒への直接的な行為はなかった。
- とても優しい性格であるが、細かいことを気にしすぎてしまう。遅刻、早退など中途半端な登校は避ける傾向がある。
- 現在母親と二人暮らし。大学生の兄が二人いる。母親、当該生徒、学級担任との関係は良好である。
- 当該生徒が学校でも適応指導教室でも安心できる居場所づくりを目標に、学校及び外部連携を深めている。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○ 個に応じた学習支援

- ・ 通級開始
- ・ 現状把握
- ・ 学習支援

○ 連携

- ・ 学校内支援
- ・ 在籍校との連携

○ 連携

- ・ 学校外支援
- ・ 教育支援アドバイザーとの連携

相談・支援等の状況

- 7月から通級開始。午前または午後のみを通級。毎日、適応指導教室には通級しているが、学校へは1日も登校できていない。自分で決めた学習に取り組んでいる。分からないことがあった時に正答だけではなく解決する手段を教えるようにし、学習の遅れを取り戻そうと考えた時に役立つような学習支援を心がけている。それを当該生徒も受け入れ努力している。
- 8月、学習が一区切りついたところで、カードゲームで他の生徒との関わりを持つ時間を設けた。口数が少なく必要最小限の会話のみであるが、周りを不快にさせる言動はない。
- 9月、通級時刻が遅い日が増えた。終了時刻間際に来たり、学習にほとんど取り組めず漫画を読んだだけで帰宅したりすることもあるが、短時間でも毎日通級していることを認める声掛けをする。
- 10月、在籍校教頭から、「当該生徒の居場所をなくさないためにも指導員との人間関係を大切に、必要に応じて教育支援アドバイザーの力を借りて進めたらどうか」との提案があった。
- 10月上旬には終了時刻の15時を過ぎてからの通級もあったが、学級担任からの声かけもあり、中旬からは無くなった。通級にかかる時間が長くて悪天候でも通級しようとする頑張りが見えた。
- 11月、教育支援アドバイザーとの面談に素直に応じた。3学期から学校に毎日登校したいと話し「そのためには少しずつ早く起きられるようにしましょう」とアドバイスを受けた。学級担任との教育相談でも3学期から登校したいと話しており、自分を追いつめることのないようにと当該生徒に伝えた。
- 12月、教育支援アドバイザーから「受け入れた方がいい部分」と「はっきり伝えた方がいい部分」を把握するためにも、児相やスクールカウンセラーの力を借りてはどうかと助言を受けた。

《 本事例の留意点 》

- 通級開始以来一度も在籍校に登校できず、通級時も在室時間は短く15分程度の日も多い。学習への取組も含め、残念ながら通級開始時より意欲が低下している部分が多く、まだ成果は現れているとは言えない。
- 当該生徒の性格や特性を把握し、母親、在籍校とともに同じ方向で対応を進めることができた。今後はスクールカウンセラーや児相との連携も考えていく。
- 在籍校への遅刻早退は嫌がるが、適応指導教室ではそのこだわりは見せず、遅刻はあるものの、欠席はほとんどない。学級担任との面談や支援アドバイザーの面談を受けることによって前向きに物事を考えられるようになったと感じる。今後も当該生徒の頑張りを認め、受け入れ、見守る姿勢を変えずに進め、安心できる居場所づくりを目指したい。

Keyword

「対人不安解消」「体験的学習活動参加」「保護者支援」

《 概要 》

中学校入学後、機会をみて特別支援学級移籍を視野に入れるということが保護者の意向であった。入学式当日、学級活動終了後に該当生徒を特別支援学級に案内したことが、中学校に対する本人の不信感を抱かせることになり、翌日から登校を拒むようになった。第1学年5月から、教育委員会相談室を利用するようになった。現在は特別支援学級在籍となり、相談室利用状況は、多い月で4回程度である。中学校入学後、登校日が1日もなかったが、第2学年6月から週に1日程度登校する状況となり、現在まで続いている。本人の意思による中学校登校、相談室利用などで、活動意欲増進に応える体制を心掛けている。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

- ・学力不振
- ・家庭環境
- ・学校不信

○保護者支援

- ・家庭環境の改善
- ・保護者の児童理解

○体験的学習活動への参加

- ・他校生徒との関わり

○対人不安解消

- ・家庭環境の安定
- ・学校外での活動

相談・支援等の状況

- 小学校では普通学級在籍であり、当該学年の学習内容についていけない状況であった。また、第6学年では、夏季休業後に欠席が増え始めた。当初、母の養育態度や家庭環境が欠席の要因であると分析されていた。
- 中学校入学時は、普通学級在籍であったが特別支援学級も利用して中学校生活を送らせるというのが学校体制であったが、当該生徒はそのことを理解していなかったことから、学校への不信感を抱き、登校しなくなった。
- 5月から教育委員会相談室での学習支援、保護者支援を開始した。
 - ・感触へのこだわりや接触要求が強く、いつもやわらかい玩具やスライムを手放せない状況であったが、年が明けてから持参しなくなった。
- 体験的な活動への参加を働きかけ、他校生徒との交流を促した。また、在籍校の学級担任と面談を実施し、情報共有を図った。
 - ・相談室での活動例：マグネットブロック、読書(絵本)、卓球、折り紙、缶バッチ、調理実習、箱庭、タングラム、英語パズル、日本地図パズル、オセロ、トランプ、卓球等
- 対人関係への不安が徐々に薄れ、第2学年になり意思表示もスムーズにできることが増えた。6月には相談室利用と中学校登校を併用するようになった。
 - ・継続登校に至っていないが、学校での活動を楽しむことができている。
 - ・インターネットで無料動画等を見ていて睡眠時刻が遅くなり、起床できないことがある。
 - ・ダンス教室に参加し、ダンスチーム員として町行事に参加している。

《 本事例の留意点 》

- 体験的学習への同席、面談を通して、保護者の不安感を軽減する。
- 当該生徒の意思による活動内容の決定と実施場面を増やし、当該生徒の不安感を軽減・解消する。
- 夏祭り、町文化祭等にダンスチームとして参加するなど、学校外での活動が増えてきた。
- ネット動画等の視聴により睡眠時間の不安定が継続している。

Keyword

「家庭訪問による教育相談」「共感的理解」「学校（社会）生活への復帰」

《 概要 》

- 不登校生徒の状況
 こだわりが強く、学校のルールや他者理解が困難である。そのためにトラブルを繰り返す中で、学校や大人への不信感を強め、第2学年秋頃から登校しぶりが始まり、12月から不登校となった。現在は適応指導教室に通い、高校への進学を決め、学習に取り組んでいる。
- 支援の目標や方向性
 ・ 共感的理解 ・ 基礎学力の習得、学習時間の保障 ・ 学校（社会）生活への復帰

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<内閉鎖的な段階> ○ 家庭訪問による教育相談 ・ 状況把握	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家庭訪問を定期的に繰り返すも、当該生徒と会話ができない状態。 ○ 進学への意欲は示すが、学習や登校にはつながっていない。
<回復段階> ○ 共感的理解 ・ 本人の興味関心 ・ 進路相談 ・ テスト時の登校促し	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しい学級担任が当該生徒の好きな漫画を話題に接触を試みるとともに、学校的话题を控えて、コミュニケーションが取れるように努めた。 ○ 少しずつコミュニケーションが取れるようになり、学校や大人への不信を言葉に出すようになった。次第に自分のことも話すようになり、将来への不安や夢を語り、学習やテストの参加を促したところ前向きな態度を表した。 ○ 保護者と釣りなどをするようになった。
<再登校段階> ○ 学校（社会）生活への復帰 ・ 進路相談 ・ 学習支援 ・ 体験活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 修学旅行中、不参加の生徒と一緒に適応指導教室の参加を促すと参加できるようになった。 ○ 断続的に適応指導教室や体験活動に参加した。 ○ 文化祭には参加できなかったが、舞台裏から見るできるようになった。 ○ 進路決定に向けて学級担任に相談し、決定することができた。

《 本事例の留意点 》

- 第3学年の学級担任の腰を据えた働きかけと、適応指導教室での寛容的な受け入れなど、役割を明確にした支援体制の整備
- 継続した指導記録をもとにした支援方針の作成、実施、改善

Keyword

「学校との連携」「コミュニケーション」「信頼関係」

《 概要 》

- (欠席の状況) ・ 第3学年女子～第1学年の夏休み明けから欠席が多くなり、学校祭後から不登校
第3学年学級担任の働きかけで、学級活動に出席、修学旅行に参加
- (不登校に至った経緯) ・ 友達が少ない。大きな声で話す生徒がいたり、本意ではないことを言われても言い返せなかったり、不安になり教室にいたくないと思うようになった。
- (生徒の性格、特性) ・ 勉強は苦手自分で自分に自信が持てない。アトピーがひどく常にマスクをしている。
- (家庭の状況) ・ 両親は当該生徒のことを考えているが、教育力は期待できない。双子の兄弟が、高校卒業し就職したがすぐにやめて家にいる。
- (学校の取組) ・ 週に一回の家庭訪問 ・ 週に一回の放課後登校の推奨

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

第2学年 6月

○コミュニケーション
当該生徒の話への傾聴
家庭との相談

第3学年 6月

○学校との連携
修学旅行に向けた取組
支援目標の共有

10月～

○信頼関係の構築
学校・家庭との連携
進路指導
自尊感情

相談・支援等の状況

- 通級開始
- ・できるだけ来室を増やすために、苦手な学習より、家のことや自分のことを話す時間を設定した。
 - ・当該生徒は話すことが好きで、徐々に家庭での悩みなどを話すようになってきた。
 - ・月に一回の調理実習に母親も参加し、一緒に実習ができるようにした。また、学級担任も参加するよう働きかけた。
 - ・こうした活動を通して、当該生徒や母親とのコミュニケーションをとることを大切にした。
- 修学旅行に向けて
- ・修学旅行には行きたいが行ける自信がないと話すことから、学級担任と連携し、登校した時の報告を聞きながら励ますようにした。
 - ・修学旅行の話し合いに参加できるようになり、修学旅行当日も参加した。
 - ・修学旅行後、達成感を得たようであったが、その後、通級も登校もできなくなった。
- 進路に向けて
- ・10月、週2回の放課後登校が再びできるようになり、サテライトにも回数は少ないが通級するようになった。
 - ・学級担任と連携し、進路について前向きに考えられるよう励ました。
 - ・知人が少ない隣の高校に進学を決め、少しずつ学習に取り組むようになった。新しい環境で頑張れそうと楽しみにしている。

《 本事例の留意点 》

- 取組の特色～学校との連携により、共通認識で進められたことが成果となった。
- 生徒の変容～自尊感情が低く、何事にも自信が持てないでいたが、新しい環境に希望を持ち頑張ろうとしている。
- 成果と課題～先を見通して物事を考えるようになったが、まだまだ精神的に不安定なところもあるので、コミュニケーションを図りながら学習等を進めていく。

Keyword

『できること』を知る」「丁寧なサポート」「『伝えること』の必要性」

《《 概要 》》

- 不登校生徒の状況…4月、中学校第2学年進級時に管外から転入した。中学校第1学年、5月から不登校が続いており、外出も困難な状態である。保護者は、転入時から当施設の利用を考えていたことから、学校と共有できる情報がほとんどないまま通級開始となった。
- 「できること」を把握するために取り組める内容を視覚的、聴覚的に提示し、興味を示したのから取り組んだ。途中での取組中止や内容変更など、当該生徒や保護者の意向を積極的に受け入れることを事前に伝え、安心して取り組める事を理解させた。自主的に選択して取り組み、達成できたことで自己肯定感を高められるよう支援した。

《《 相談・支援等の実際 》》

相談・支援等の視点

○「できること」を知る

- ・学習状況、優位性、対人スキル等を把握し、無理なく取り組める内容を設定

○丁寧なサポート

- ・緊張や不安な状態を見逃さず、速やかに対応して心の安定と信頼を構築

○「伝えること」の必要性

- ・伝えることの大切さを繰り返し説明し、自己理解の深化と自己肯定感の向上

相談・支援等の状況

- 入級時、ほとんど基本情報がない状態だったため、通級中の活動の中で「何ができるか」を探ると同時に、「得意・苦手」を見極め、落ち着いて取り組めることを示し、自主的に選択できるよう支援した。
- 管理職や学級担任とも随時情報交流にて取組内容を共有した。学級担任が毎日、家庭訪問で当該生徒に会っていたので、取組内容を話題に出してもらうなど一体感をもった支援を意識した。
- 作品を制作する工程をポイントで区切り、完成予定のものを実際に用意し、指示等を視覚的にわかりやすく伝えられるよう工夫した。
- 登校した際、授業の制作活動の中で上記のような工夫をするよう学校に働きかけ、登校に対する不安の軽減を図った。
- 定期的に通級することで生活リズムが整い、メリハリのある生活が送れるようになった。通級開始時に1人で通級できる日が増えた。
- 発声が少なく困り感を伝えられない状態だったため、「SOSサイン」を決め、不安や困っている状況に速やかに応じられるように工夫した。
- 「困り感」を伝えることに対し不安が大きいことが感じられた。「伝えられた」ことを認め褒めながら、発信時に生じる不安感の軽減に努め、伝えることの重要性を理解するための支援を継続した。

《《 本事例の留意点 》》

○取組に対して消極的な背景へのアプローチ

当該生徒は、「真面目、自己肯定感が低い、心配性、プライドが高い」ことが一歩踏み出せない要因の1つと考え、個に応じた丁寧な対応を心掛けた。提示教材を2、3種類に絞り、活動の見通しを視覚的に示し、一緒に取り組み、適宜説明を加えながら進めることで、緊張や不安に陥る時間を軽減させ充実した活動時間を維持し達成感を味わえるよう支援した。

○安心感から信頼を構築

当該生徒は、通級当初は視線をあまり合わせず、問いかけにも首を振るのみだったが、一緒に過ごす時間と日々の取組で築いた安心感等から会話が生まれ、雑談ができるようになった。現在は学校での丁寧な指導により安定した登校が続いている。また、短時間ではあるが1人での外出や、家族と一緒に地域のイベントに参加したり、高校進学に向けて学校見学に参加したりすることができるようになった。

Keyword

「生徒理解」「自己選択」「合意形成」「自信回復」「進路選択」

《 概要 》

- 中学校第2学年の秋から、登校渋りや体調不良、理由のはっきりしない欠席が増えた。
- 学級の騒々しさへの不快感、学習への不適應、特定の級友との関係不和などの要素が重複し、ストレスを抱えた状態が続いていたが、第3学年6月に連続欠席になった。
- 自己選択に基づく学びの場を提供するため、7月、教育委員会での教育相談を実施し、適應指導の場を検討した。8月、小集団と個別学習のそれぞれを見学したのち、当該生徒の選択に基づき個別学習支援を開始した。当初は90分ほどの通室であったが現在はほぼ終日学習しており、3学期の学校復帰及び高校（定時制）進学に向け前向きに通室中である。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<p>7月～</p> <p>< 支援体制の構築 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒理解 ○ 自己選択 ○ 合意形成 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 6月から、学校では部分登校や別室登校を中心とした支援策を展開したが、登校に至らなかった。 ○ 7月、保護者の意向から学校外の適應指導を検討するに当たり、学校を通じて教育委員会指導主事による教育相談を実施した。不適應要因が不明確なため、成育歴等から情報整理した結果、小学校時に特別支援学級在籍であったが保護者の強い意向により中学校進学時に通常の学級に移籍した事実、当該生徒は通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする生徒であること、穏やかな人柄であるが人間関係構築に不安を抱えていること等が判明した。
<p>8月～</p> <p>< 学習支援 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 自信回復 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当初、保護者は小集団での支援を希望していたが、当該生徒の特性を踏まえ、無理のない個別学習も視野に入れ見学を実施した。結果、保護者の思いとは違い、当該生徒は個別支援を希望したため、まずは当該生徒が望む場を活用することを提案し、個別支援の場から活用することで、当該生徒、保護者の理解を得た。 ○ 適應指導担当者による個別学習支援を開始し、通室頻度、時間は本人の決断に任せていたが、徐々に拡大し、午前中だけでなく、ほぼ終日に発展していった。
<p>11月～</p> <p>< 学校復帰に向けて ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 進路選択 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国語や数学の学び直しを主に、当該生徒のペースに合わせて学習を実施した。 ○ 学校では学級担任が病休不在となっていたため支援者が不明確であったが、学年主任が適應指導経験者であることから保護者の相談窓口として設定した。当該生徒及び保護者の信頼感、安心感が高まった。以後、通室状況の確認や進路選択について、学校、家庭、適應指導担当者間のネットワークが機能した。 ○ 3学期からは、学校復帰と受検、卒業に向けた段階的な支援を進める予定である。

《 本事例の留意点 》

- 当市では学校外の適應指導の活用には、指導主事による教育相談を積極的に実施している。
- 不適應要因が未整理であったため、個の特性を再把握した上で、実態に応じた適應支援を設定した。
- 当該生徒が納得し、安心できる環境と支援を設定することで、達成感や自信回復につながった。
- 当該生徒の感じ方や実態と保護者の思いにズレがあったため、初期段階で丁寧な合意形成を図った。
- 指導主事がコーディネートすることで、学校、家庭、適應指導担当者間の関係構築が進んだ。
- 特別支援教育との関連で、社会的自立に向けた適確なキャリア支援になっているか検証する必要がある。

Keyword

「保護者と繋がる」「学校と繋がる」「児童生徒と繋がる」

《 概要 》

- 小学校第2学年男子。両親と兄（小学校第6学年・特別支援学級在籍）、幼稚園の弟と妹の6人家族。これまで長期欠席はない。両親は共働きで家庭の教育力は低いが、当該児童の学習能力に問題はない。不登校の原因は友人関係であり、廊下を走ったり、学習準備が遅かったりした時に当該児童だけが他の児童から注意されたり、2回ほどケンカになったりしたこともあり、学校へ登校しても高熱を出すなど体調を崩して帰宅するという状況となった。
- 保護者と現在の学級担任は相談できる関係であるが、保護者は第1学年の時の学級担任の対応に不信感があり、学校への信頼が十分ではなく、適応指導教室へ当該児童を通わせたがっていた。
- 当該児童の元気を回復させ、学校と連携・協力して、1日も早い学校への復帰を支援している。
- 適応指導教室への通室を強く希望している保護者と学校との信頼関係の回復に努めている。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<p>○保護者と繋がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の思いに寄り添った支援に努め、信頼関係を築く 	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者との面談～保護者、学校、相談室でしっかりと連携・協力して、当該児童のために一番良い対応、支援をする方向性を共有した。 ○当該児童の不登校の状況や適応指導教室への通室～在籍学級の児童及び保護者への説明や、児童への支援や対応について保護者の思いを受け止めながら進めることで信頼関係を築くようにした。 <ul style="list-style-type: none"> ・ありのままを話してもらいたい。学校へ行けなくなった理由や、適応指導教室へ通っている状況を児童や保護者にも知ってもらいたい。 ・当該児童の登校の気持ちを高めようとするが、まだ学校へ行こうという気持ちには至っていない。当該児童の気持ちを尊重したい。
<p>○学校と繋がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校訪問 ・学校長、担任教諭の来室指導 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校復帰への支援 <ul style="list-style-type: none"> ・運動会への参加を目指して～運動会練習が始まり、その様子を一緒に見に行こうと誘ったところ、了承されたので、運動会練習の時間割を確認して学校訪問を実施する。 <p>学校訪問の実施（指導員が付き添い計4回） 在籍学級の児童と一緒に練習をする。児童相互に話す機会を設定する。 学校長、学級担任の来室指導、及び学習参観を実施（計5回）</p>
<p>○児童生徒と繋がる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通級指導による学習支援 ・人と繋がり一緒に活動 	<ul style="list-style-type: none"> ○適応指導教室「ふれあいくらぶ弥生」での学びの支援 <ul style="list-style-type: none"> ・学習サポート～国語、算数の教科書学習、漢字や計算ドリル、PC（タブレット）を活用してインターネットの学習 ・体験活動、集団生活への適応～卓球やトランプ、UNOなどの遊びを通して、指導員や通室している中学生との交流の積極的な取組 ・スライム作り（通室している中学校第2学年特別支援学級の生徒と活動）

《 本事例の留意点 》

- 学校との連携・協力により学校との繋がりを切らさずに学校復帰への支援に取り組む。
- 保護者の思いに寄り添い、対応することで保護者との信頼関係を築き、児童への支援を充実させる。
- 適応指導教室の活動及び周りの人との交流を通して、人と繋がることの楽しさや大切さを理解し、コミュニケーション能力を高める支援に努める。

Keyword

「コミュニケーション能力の育成」「体力向上」「学校・家庭との連携」

《 概要 》

- 当該児童は第4学年の8月に他市から転入した。9月の腹痛による欠席から登校時刻が近づくと足がガクガク震える、腹痛を訴えるなどの身体症状が出て小児科を受診した。第5学年進級後も4月の3日間以降登校できず、DVD・テレビ視聴、ゲーム、読書などをしていて、昼夜逆転の生活のため、学級担任の勧めで適応指導教室において面談を行い、通級することとなった。今年10月に心理検査を受け、11月から服薬を開始している。
- 生活リズムの改善による適応指導教室への通級の定着、意図的な他者との交流によるコミュニケーション能力の育成、菜園作業を通じた体力の向上を図り、学校復帰につなげる。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点	相談・支援等の状況
<ul style="list-style-type: none"> ○ コミュニケーション能力の育成 <ul style="list-style-type: none"> ・ 交流する場の設定 ・ 自尊感情を高める取組 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 支援の方向性 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生活リズムの改善、コミュニケーション能力の育成等の取組により学校復帰を目指す。 ○ 相談・支援等の状況 <p>集団生活への適応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 交流ゲームを中心に人との交流の楽しさを経験させ、通級の定着を図る。 ・ 菜園作業など体を動かす機会を設定し、体力向上を図る。 ・ 調理学習やゲームで他者と交流し、コミュニケーション能力の育成を図る。 ・ 好きなこと、得意なことをアピールする機会を設定し、自尊感情を高める。 ・ 補助教材を用いた学習支援や繰り返し学習を行い、成功体験を積み重ねることで、自信につなげる。 ・ 短所を長所として伸ばすとともに、思い通りの結果が得られない場合でも、気持ちの切り替えができるよう、考え方の転換方法を指導する。 ・ 通級・登校できない時は、電話で状況確認し、家庭訪問を実施する。 ・ 保護者面談を実施し、生活リズムの改善や配慮の必要性を指導する。 ・ 学校と情報交換し、学校復帰しやすい体制を整える。 ○ 児童生徒の変容 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生活リズムが改善され、体力がついて歩いて通級する日が増えた。 ・ 表情が明るくなり、自分の気持ちを主張することができるようになった。 ・ 学芸会参加を目指して登校し、学芸会の練習に取り組み、当日も参加できた。 ・ 登校できる日が増え、教科によって教室で授業を受けることなどができるようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 体力向上 <ul style="list-style-type: none"> ・ 菜園作業など体を動かす場の設定 ・ 生活リズムの改善 	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校・家庭との連携 <ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者面談の実施 ・ 学校との情報交換 	

《 本事例の留意点 》

- 生活リズムの改善については、通級時に日記を付けることで生活を振り返る場面を設定するとともに、保護者と面談し、協力を求めた。
- 当該児童の実態から、長所・短所を含め支援の必要な部分を分析、個別の指導計画を立てた。
- 当該児童の得意なことをアピールする機会を設定し、大人が認めることで、自尊感情を高めた。
- 通級できない時は電話連絡や家庭訪問で支援を継続し、当該児童及び保護者にいつでも居場所が確保されていること、保護者以外にも理解者がいることを伝えた。

Keyword

「情報共有」「専門機関との連携」「場の提供」

《 概要 》

- 様々な困り感をもった児童生徒が混在した状況の中で、「どんな人間が、どんな場で、どんな時に」当該児童生徒にあった学びを提供するかを、関係者が共有しながら、支援体制の構築を図る。

《 相談・支援等の実際 》

相談・支援等の視点

○ 情報共有

- ・教育支援センター、教育委員会、学校の情報共有

○ 専門機関との連携

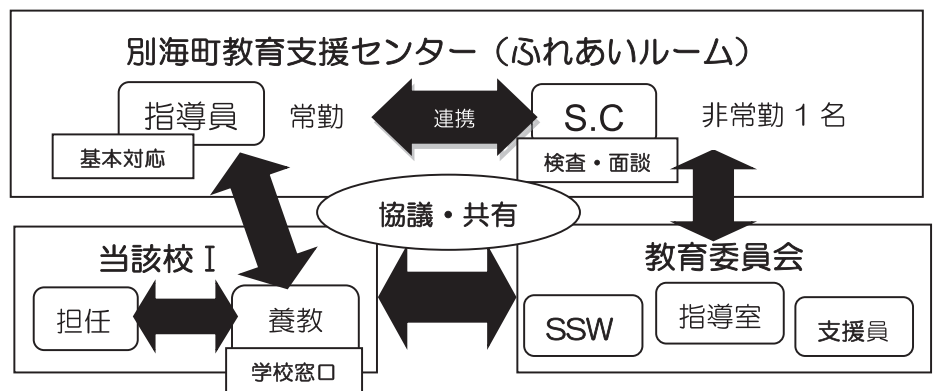
- ・SC、SSWによる見取りや家庭への対応

○ 場の提供

- ・学校復帰に向け、児童生徒の状況に応じた場の提供

相談・支援等の状況

- いつ、どこで、誰が当該児童生徒にあった学びを提供するのか、関係機関の連携を図り支援体制を構築する。



- 町教委指導室（教育支援員事務局）が全体を把握しコーディネートする。
⇒学校の情報、保護者の希望等により大まかな方向性を決定する。
- 臨床心理士の資格をもつSCによる客観的な当該児童生徒の見取りを行う。
- 当該児童生徒に教育支援員を配置し、日常の対応を進める。
- 家庭の対応については、必要に応じ、上級教育カウンセラーの資格をもつSSWが対応する。
- センター指導員と、学校の窓口である不登校対応に特化した養護教諭、教育支援員が常に情報を共有し、当該児童生徒にあった『学習サポート』の提供と、学校復帰に向けた集団生活の適応状況について把握する。
- 『学校復帰に向けた支援』として、当該児童生徒が抵抗感を感じないように児童生徒の状況に応じた場の提供を行う。（教育支援センター⇒地域センター⇒校内別室等）

《 本事例の留意点 》

- 教育委員会がコーディネートすることで、複数の機関による**情報共有**を行うとともに、当該児童生徒にあった対応機関の決定や対応等を取ることができる。
- 学校と教育支援センター、**専門機関が連携**して、当該児童生徒の学校復帰に向けた取組を行った。
- 当該児童生徒の状況に応じた**場の提供**を行うことで、抵抗感を感じさせずに学校復帰につなげることができる。